

英語を母語とする日本語学習者における 「～てしまう」の使用状況

棚橋 明美

要 旨

中級レベルに入ってもなお日本語学習者の発話から不自然さが感じられるのはなぜだろうか。誤用はもちろんだが、ある特定の言語形式の「非用」もその大きな原因の1つではないだろうか。そのような観点から、本稿では、英語を母語とする日本語学習者によるストーリー・テリングの発話資料を言語形式「～てしまう」の使用状況と使用環境について分析し、日本語母語話者のそれと比較対照を試みた。その結果、滞日期間及び学習期間が長い者ほど「～てしまう」の使用頻度が増し、またこれを使用している者は適切な場面で使用できているということがわかった。しかし、日本語母語話者の多くが「被害の受身」と共起させているのに対し、英語母語話者にはそのような傾向は見られず、遺憾の「～てしまう」は使用できるが「被害の受身」は非用となっているという結果であった。

〔キーワード〕 「～てしまう」、遺憾、被害の受身、非用、ストーリー・テリング

1. はじめに

初級レベルの日本語を習得した学習者が、中級すなわち「いくらか時間的な流れを伴った「文」によって表現できる水準」¹⁾まで進むと、それまで「文型」あるいは「文法」の習得状況に目を奪われがちだった教師の側も、より自然な日本語を学習者たちに求めるようになるようである。しかし「自然な」日本語とは、いったい何なのだろうか。

水谷(1985)は、英語を母語とする日本語学習者(以下、Eとする)の日本語による発話が、中級レベルになっても何か違和感を与えることに注目して様々な言語形式の「非用」²⁾を観察し、その原因を英語と日本語の志向性の違い³⁾に求めている。すなわち話者が無意識に使っている言語形式はこの「志向性」の表出であり、日本語母語話者(以下、Jとする)が「立場志向」に基づいた言語形式を選択するのに対し、Eは「事実志向」に

基づいた言語形式を選択するが故に、Eの発話の中に「立場志向」に基づく言語形式の「非用」が生じるというのである。

誤用はもちろんだが、「非用」が学習者による日本語の発話の不自然さの原因となっていることは、棚橋（1993）などで、すでに繰り返し述べた。棚橋（1995、1996）では、収集された言語資料において、特定の場面ではほとんどのJが用いている言語形式（被害の受身と授受表現）の学習者による使用状況について考察した。そこでは、予測されたように、学習歴および滞日期间が短いほど、これらの言語形式が「非用」となる傾向が見られた。日本語の「自然さ」には、音声面など様々な要素が絡みあっているということはもちろんだが、これら「非用」になりやすい言語形式を引き出して、それらの使用を積み重ねていくことが、「自然な」日本語に近づいていくための近道の1つとは言えないだろうか。

棚橋（1995）において、言語形式「～てしまう」が、ある特定の状況下でJによって多く用いられているのに気づいたものの、問題提起のみに終わっていた。そこで本稿では、この「～てしまう」について、より自然な日本語ということを意識に置きながら、前稿の「被害の受身」とも関連づけて、分析と考察を行なってみたい。

2. 学習者および資料の概要

本稿で用いられた資料は、棚橋・大島弥生共同作成によるオリジナル20コマ漫画（稿末[資料]参照）のストーリー・テリングで⁴⁾、棚橋（1995、1996）と同様である⁵⁾。施験者との一対一の面接で録音されるが、録音時は被験者の後ろへまわり、あいづちなどを求められないようにした。原則として、日本語の発話は2回採取され、その後簡単な雑談をはさんで、母語の発話が採取された。バリエーションがあったため、2回分共資料として用いた。

[表1]は、被験者の背景である。被験者は滞日期间および日本語学習歴により3つのグループに分けられる。すなわち、

①E1～E5は、初来日後1カ月以内の発話資料。母国での日本語学習歴は1～4年以内。（E5は中国系二世）。②E6：日本語学習歴は、米国の大学で4年以上、日本の大学で4カ月。2度目の来日後、2カ月めの発話資料。トータルの滞日期间は6カ月。③E7は来日6年めに入ったとこ

ろ。E8は母国のミドルベリー大学の夏期講習を2 semester修め、日本に1年間留学。再来日後、日本語学校に半年間通う。資料は再来日後5年めのもの。E9は母国での学習歴4年以上。高校時代に1年間、大学時代に半年間、滞日経験があり、米国の大学卒業後の仕事でも2年間は日本語をよく使っていた。発話資料は3度めの来日後2年経過時のもの。

統制群として、お茶の水女子大学大学院に在学する日本語母語話者（J）9名の発話を採取した。原則として2度採取したが、こちらもバリエーションがあったため、2回分共資料として用いた。そのため、資料は延べ16名分として扱う。

〔表1〕

被験者	性別	母国	年齢	職業	被験者	性別	母国	年齢	職業
E1, 2, 6	男	米国	20代	米院生	E7	男	英国	30代	会社員
E3	女	米国	20代	日研生	E8	女	米国	30代	画家
E4, 5	女	オーストラリア	20代	日研生	E9	女	米国	20代	日院生

3. 分析方法

「～てしまう」について日本語学的なアプローチをしたものは多くはないが、尾上（1982）、佐久間（1992）、藤井（1992）などがあり、また、押尾（1994）は日本語学・日本語教育学の両面から綿密な取り組み方をしている。

日本語教師のために書かれた文法書である吉川（1989）では、「～てしまう」を次の図のように分類し、「(1)はアスペクト、(2)(3)はアスペクト、ムード、(4)(5)はムードであると考えられる」としている。

- (1) <完了> → (2) <めんどろ>
 (3) <残念> → (4) <うっかり>
 (5) <不都合>

この分類の仕方は優れているが、本稿では煩雑さを避けるため、富田（1991）の「完了」と「遺憾」の2つに分ける分類法を採用したい。そして、日本語学の面に踏み込むのは避け、「遺憾」の意味を表わす「～てしまう」について、日本語教育学的观点から取り上げてみたい。Eが「遺憾」の意味を表わす「～てしまう」を正しく使えるということは、ある「立場」をとっているということであり、「立場志向」に立った言語形式を1つ習

得したということが言えるのではないだろうか。

まず、棚橋(1996)において「授益行為のある場面」と「被害のある場面」の2点を扱った際、Jの発話の中で「～てしまう」がかなり特徴的に用いられているとの印象を持った。そこで本稿では、この「～てしまう」が実際にJの発話においてどのような環境・頻度で用いられているのかを明確にし、そのうえで学習者の横断的および縦断的資料と対照して、学習上の問題点は何かということについて考察してみたい。

なお、「～てしまう」の口語形である「～ちゃう」も「～てしまう」に含める。

4. 結果と考察

4. 1 「現在完了形」の負の転移の可能性について

水谷(1985)は「日本語の「～た」が単純過去にも用いられるため、それと区別しようという意識のためか、「～てしまう」を完了に当てようとする傾向が見られる」⁶⁾と述べ、「～てしまう」については、非用ではなくむしろ乱用のほうを危惧している。確かに今回の調査においても、本ストーリー・テリング中で用いられたすべての「～てしまう」が「遺憾」の意味を表わすものだと言い切ることはできないし⁷⁾、1つ1つ鑑定するのも困難である。

そこで本稿では、Eの英語による発話で完了形の用いられている場面が、日本語による発話の「～てしまう」と同場面なのかどうかを調べてみることにした。同場面であれば、英語の完了形の負の転移(干渉)の可能性が大きいのではないだろうか。その場合、Eは「～てしまう」を「遺憾」ではなく「完了」の意味に用いている可能性が高い。

結果は、Eの英語の発話の中で完了形が用いられていた数は非常に少なく、次の3例のみであった。

E 7 : M has been looking forward to today.

E 8 : Poor M had had enough.

E 9 : By this time, M's mother had had enough of Disney
Land, and ...

これは、水谷の例がほとんど自然な会話から収集されたものであるのに対して、本稿の収集したものがストーリー・テリングであったため、「物

語り」という特殊な形態をとることになったせいで、完了形が大変少ないという結果になったのであろう。ディズニーランドやＪＲの出てくる現代の物語であるにもかかわらず、英語で「Once upon a time」、日本語で「昔昔」という表現を用いて話し始めたＥもあった。

この場面でのＥの日本語の発話の中に「～てしまう」は含まれていなかった。そこで本稿においては、Ｅによって用いられている「～てしまう」が英語の完了形からの負の転移によるものである可能性は考慮に入れずに考察したい。

４．２「～てしまう」の使用回数について

〔表２〕

	使用回数：初回	初回より４か月後	初回より９か月後
①	E1 (1)なし (2)なし		
②	E2 (1)なし (2)なし		
③	E3 (1)なし (2)なし	(1)なし (2)なし	(1)なし (2)なし
④	E4 (1)なし (2)不明 (1?)		(1) 1 (2) 2
⑤	E5 (1) 2 (2) 4	(1) 3 (2) 3	(1) 5 (2) 4
⑥	E6 2		
⑦	E7 (1) 2 (2) 6		
⑧	E8 7		
⑨	E9 9		

この２０コマのマンガを描写するためにＪの用いた「～てしまう」の回数は最高が８回、最低でも３回、平均５．８１回であった。使用頻度の順位としては、(1)５回（４名）(2)８回、７回、６回（各３名）、(3)４回（２名）、(4)３回（１名）であった。つまり、この内容を描写するのに「～てしまう」を用いるほうが、より自然な日本語と言えるようである。

それに対してEの使用回数は〔表2〕のとおりで、最高9回、最低0回であり、上級で滞日期間の長い者ほど多く用いていることがわかる。E4の来日直後の2回目の発話に「不明」とあるのは、本人が「～てしまう」形のつもりで使っているのかどうか判定不可能なもので（使用数には入っていない）、次のような部分である。「…石は男の人を アノhitし hitしました、hitしまいましたね」。しかしこのE4は、〔表2〕からわかるように、来日9カ月後の発話では「～てしまう」を使用するようになっている。

4. 3 「～てしまう」の使用環境について

〔表3〕

コマ番号	J人数	J使用順位	E使用順位	E人数
④	14	1	2	8
⑧	14	2	1	9
⑪	12	3.5	3	7
⑫	12	3.5	4	6
⑰	10	5	7.5	2
⑱	9	6	7.5	2
⑤	4	7	5	5
⑬	2	8	7.5	2
③	1	9.5	11	0
⑮	1	9.5	7.5	2
⑳	0	11	10	1

J、Eがそれぞれどのコマで「～てしまう」を使用しているかを表わしたものが〔表3〕である。1つのコマについて2度以上「～てしまう」を用いて描写している者もあったが、そのことは考慮に入れず、当該コマについての描写の中に「～てしまう」を用いていた者の数としてカウントした。E4、E5については来日後4カ月後・9カ月後の発話も加え、またほとんどの被験者から一度の録音に2回の発話を採取しているため、Eの延べ数は25ケースとなる。

〔表3〕からJとEについてスピアマンの順位相関係数を計算すると、

$$r_s = 0.902$$

これは0.002%水準で有意な相関であると言える。すなわち、Eの中でも「～てしまう」を用いている者は、Jとほぼ同様の場面で使うことができている、つまり使うべきところで使っているということが言える。

4. 4 「被害の受身」との関係

Jの「～てしまう」の使用総数は94例あり、そのうち「受身形」と共に用いられているものは16例、Eでは使用総数48例のうち「受身形」と共に用いられているものは6例あった。この数値の独立性をカイ2乗検定で調べると、 $\chi^2 = 0.21 < 2.71$

この結果から、2つの数値間に相関関係を想定することはできない。従って、Jがこのストーリー・テリングにおいて「～てしまう」を「受身形」と共に使用するほどには、Eは使用していないということが言えよう。

5. おわりに

英語を母語とする日本語学習者（初級後半から中上級）を対象に、日本語の「～てしまう」の使用状況および習得状況について考察した結果、次のような示唆を得ることができた。

- (1) 学習歴の浅い者や来日間もない者は、ほとんど用いることができないが、滞日期間が長くなると次第に使うことができるようになる。この傾向は、横断的資料からも縦断的資料からも見られた。
- (2) 使うことができるようになった者（つまり習得の進んだ者）は、日本語母語話者が用いる場面とほぼ同場面で用いている。すなわち、用いるのが自然と思われる場面で用いることができている。
- (3) しかし、習得の進んだ者でも、多くの日本語母語話者が行なっている「受身形との共起」は習得しにくい。

「遺憾」を表わす「～てしまう」自体の習得はさほど難しくはないが、受身との共起ができないということは、「～てしまう」自体よりも、やはり受身の習得により困難があるのだろう。いわゆる「被害の受身」は「～てしまう」と共起することが多いのだから、これをまとまったセット・フレーズとしてシラバスの中に積極的に含めることを、日本語教育への提言としたい。

注

1) 池田(1974)は、「初級とは、思考が「語」によって表現される段階、言いかえれば、ほとんど時間的な流れのない「文」の段階をさす。さらに、その思考が、いくらか時間的な流れをともなった「文」によって表現できる水準を中級の段階とする」としている。

2) 中級レベル以上の学習者が、すでに学習したにもかかわらずある言語形式を用いない、あるいは用いることができないという現象を表わす、日本語教育の術語。水谷(1985)による造語。

3) 水谷(1995)では、次のように述べられている。：「事実志向型」と「立場志向型」の別は、日本語と英語の文づくりの傾向や主語の立て方を比較する際の、ひとつの柱として考えられるが、この二つの型の切り替えのむずかしさが、日英両語を外国語として学ぶ際の大きなつまづきとなる。

(p. 24)

4) 絵を見ながら内容を描写する方法で、心理学の術語とは異なる。渡辺は混乱を避けるため、「ストーリー・ナレーション」という語を使っている。

5) このストーリー漫画全体および資料収集の詳しい方法については、棚橋(1995)参照。なお、被験者旧E6(1995)は、英語の発話資料が採取されていないことが判明したため、新E6(1996)とさしかえた。従って、被験者はすべて棚橋(1996)の場合と同一である。

6) 水谷(1985) P. 89

7) 富田は(1991)は「完了」と「遺憾」の意味をはっきり区別することができない場合の例として、以下のように述べている(PP. 177-178)。：例えば、家庭で夫が妻に数日前の新聞があるかどうか尋ねたとき、妻が「もう捨てました。」ではなく「もう捨ててしまいました。」と答えたときの妻の気持ちは、「捨てたのでもう残っていない」ということと「必要だと思わなかったので、捨ててすみません」という気持ちが表現されています。

引用文献

- 藤井由美 (1992) 「してしまう」の意味『ことばの科学5』むぎ書房
P. 17-40
- 池田摩耶子 (1974) 「進んだ段階における「話し言葉」について」『日本語教育23号』p. 6
- 水谷信子 (1985) 『話し言葉の文法』くろしお出版 p. 13-4, 191, 201, 215 (以上、「非用」)、p. 23-33, 155-6 (以上、事実志向・立場志向)、p. 89-91 (「～テシマウ」)
- 尾上圭介 (1982) 「現代日本語のテンスとアスペクト」『日本語学』vol. 1 no. 2, p. 17-29
- 押尾和美 (1994) 『～テシマウの意味理解と習得に関する一考察』お茶の水女子大学修士論文
- 佐久間鼎 (1992) 『現代日本語の表現と語法』くろしお出版 P. 149, 165, 171
- Selinker, Larry (1972) 「Interlanguage」『IRAL』Julius Groos Verlag, Heidelberg.
- Stubbs, Michael (1983) 『Discourse Analysis: The Sociolinguistic Analysis of Natural Language』Blackwell
- 棚橋明美 (1993) 『日本語中級学習者における非用の横断的研究－韓国語・中国語話者を中心に』お茶の水女子大学大学院修士論文
- ―― (1995) 「英語を母語とする日本語学習者における非用－授受行為と被害の場面をてがかりとして－」『人間文化年報1994年第18号』お茶の水女子大学
- ―― (1996) 「英語を母語とする日本語学習者の用いる言語形式－授受行為と被害の場面をてがかりとして－」『人間文化年報1995年第19号』お茶の水女子大学
- 富田隆行 (1991) 『基礎表現50とその教え方』凡人社 p. 176
- 渡辺亜子 (1996) 『中・上級日本語学習者の談話展開』くろしお出版 p. 8
- 吉川武時 (1989) 『日本語文法入門』アルク p. 130

(東邦音楽大学非常勤講師)

[資料]

